

おいらの エーデル

Oirano love edel vol.9

エーデル土山ショートステイ通信

いつもエーデル土山のショートステイ通信「おいらのエーデル」をご覧いただき誠にありがとうございます。気がつけば今年も残すところわずか一ヶ月となりました。師走とはお師匠さんですら、走るほど忙しいという意味のようで、年末の慌ただしさはどこのご家庭においても同じだと思えます。寒い日が続きますが、温かい食べ物や、温かいお風呂に入り、風邪など吹き飛ばしていきたいですね！
それでは今号もお楽しみ下さい。

『ハンドマッサージ』

一昨年度から開始しているハンドマッサージ。ご好評につき今年もやっております。ご利用者からは「気持ち良かった」「またお願いします」とお声を頂いております。私たちの指が動く限り揉み続けます（下岡、奥村）



『作品作り』

今年度も皆様と一緒に制作させてもらいました。色紙スタンブ、アクセサリー、箸置きとすでに3つの作品を制作しています。工作をしてもらう中で皆様と楽しい時間を過ごす事ができました。ほんとうにありがとうございました。

『おやつ作り』

毎月おやつ作りを開催しております。ホットケーキ、タコ焼き、団子などなど。おなじみ下岡ケアワーカーのレシピに沿っておやつ作りを開始。和やかな雰囲気の中で皆様にも手伝ってもらいながら一生懸命おやつを作りました。味は格別。少しの失敗はご愛嬌。これからもおいしいおやつを考えます
(下岡)



奥村哲弥のコラム 第9回 『メリークリスマス』

メリークリスマス。今年もまたサンタの季節が到来してきた。僕は基本的にはクリスマスには興味がない。というのも、僕には子供のころから気に入ったプレゼントがもらえなかったからだ。通常、小学生にもなればサンタクロースが自分の親であることに気付くはずだ。でも、僕は自分の親がサンタクロースだなんてことは全く知らずに小学校高学年までを過ごしていたのだ。いつも、親から『哲弥、今年は何をサンタに頼むんだい』と聞かれていたので、おもちゃの広告を指さし、『これがほしい』と伝えていた。でも、クリスマスの朝、目覚めると、僕が欲しがっていたプレゼントよりも価格的にあきらかに安いであろう玩具がベッドにはあった。『・・・今年もほしいプレゼントもらえへんだやん・』プレゼントの包み紙を破る期待感と、破った後の喪失感。これが僕のクリスマスだった。しかし時が経ち、親がサンタクロースだということを知った僕は、プレゼントに何が欲しいのかなんて全くどうでもよくなった。なぜなら、僕の親は商売をして必死に僕を育ててくれた。学校へも行かせてくれていた。これ以上に何も望まなかった。でも小学生の僕が、親がサンタとも知らずに高額な玩具を説明していたことには一抹の、後悔の念を感じた。『何も知らなくてゴメンな』と思春期の僕は自分を責めたのだ。なぜクリスマスがあるのだろうか。家族によっては、プレゼントをもらえない家庭だってあるのではないだろうか。クリスマスのイルミネーションがきらびやかになればなるほど、僕の少年時代と同じような気持ちを抱いている子供たちがいるのかもしれない。その後僕は福祉職に就き、今では人を支える仕事をしている。その中で、子供たちだけではなく、多くの人が幸せになってほしいと祈るばかりだ。僕が子供のころ希望した玩具はもらえなかった。だけど、クリスマスはやってきて、親が玩具を枕元に置いてくれた。そうか、それは悲しいことではなくとも暖かいことじゃないか！そう気づいたころ、僕は一児の親になっていた。今年もクリスマススムードが漂ってきた。僕は息子の寝顔を見ながら、自分の少年時代を思い出す。そして、一言、息子につぶやいたんだ『メリークリスマス』と。